

復興漂流

借金、孤独、酒、けんか

(1面の続き)

6月下旬、岩手県大船渡市の防災無線から放送が流れた。「69歳の女性がなくなった」との内容だった。その日、女性が住む県営住宅近くの海岸で遺体が見つかった。

女性は家族でワカメやカキの養殖を営んでいた。家族は無事だったが、自宅と養殖施設、船が津波で流され、借金だけが残った。知人によると、避難所ではトイレ掃除や食事の準備を率

先して引き受け、元気な様子だったが、時折、「借金もあるし、これからどうして生きていくべなあ」とふさぎ込んでいたという。

震災から4か月が過ぎ、被災者は避難所から仮設住宅やアパートなどへと移っている。この女性も5月に県営住宅に移った。警察は被災を苦しめた自殺の可能性が高いとみる。自らも仮設に入った知人は「避難所ではみんながいるから気が紛れていたが、仮設に来てからは先のことを色々考え

てしまう」と漏らす。震災関連の自殺が何件あるのか、正確な統計はまだない。だが、宮城県石巻市で5月末、新築したばかりの自宅を流された男性(49)が家族を残して自殺した。福島県南相馬市の女性(93)は6月下旬、「お墓に避難

「仮設生活」に終わりが

見えず、家族とうまくいかなかったり、酒を頼ったりするケースも見られる。宮城県東松島市の今泉健一さん(58)は6月下旬、仕事の関係で3か月ぶりに東京から家族のいる同市の仮設住宅に戻って驚いた。浸

水した自宅のあった場所に家を再建しているのか、集団移転するのかすら決まっていない。「早く仮設を出たい」と、いら立つあまり家族への言葉がきつくなり、けんかも増えた。

建設現場で技師をしていなくなくなり歯止めが効かなくなると、妻と娘を失った岩手

2年の息子の将来を考えると食事のどを通らず、体重が10キロも減った。6月に仮設住宅へ入れたものの、夜眠れず、以前はあまり飲まなかった焼酎を毎晩あおるようになった。

国立病院機構久里浜アルコール症センター(神奈川 見せる。 「仮設住宅でも地域のつ

大船渡市に派遣し、約100人を診察した。現地入りした真栄里仁医師は「5月 要だ」。家族を亡くした被災者のケアに当たっている 仙台市立病院の滑川明男医